

特集 IAML ANNUAL CONFERENCE - NAPLES 2008

2008年7月20日より25日まで、ナポリにおいて開催された年次大会の報告です。

副支部長・代表参加者 藤堂雍子氏 ...p.1

RILM 会議報告：RILM 事務局長 関根敏子氏 ...p.6

RISM 会議報告：RILM 国内委員長 樋口隆一氏 ...p.9

発表者 伊藤真理氏 ...p.13

発表者 山田高誌氏 ...p.15

助成金を受けての初参加 森佳子氏 ...p.16

写真は特に記載のない限り執筆者提供。Ⓜは樋口隆一氏提供。

IAML 2008 Napoli

藤堂 雍子

ナポリ音楽院でカウンシル・ミーティング

真夏の7月20日(日)午後から最初のカウンシル・ミーティングがナポリ音楽院で始まった。前日空港から鉄道駅周辺を通過した時は、荒廃している街の姿が目立ち、治安が心配だったが、大きな棕櫚が葉を揺る音楽院中庭への扉を開け放ち、冷房もないホールでのミーティングは暑く、街の上空を通る飛行機の爆音が聞こえ気になる以外は、良き時代のインティメートな雰囲気漂い、日曜の午後とはいえ、会議が始まる心地よい緊張感が流れ



音楽院中庭

ていた。(翌日からの会議は、トレド通りを南に徒歩20分余り下った大型客船発着波止場の上にある近代的な複合施設で催された)。(1) シドニー大会の総括はカウンシル会議代表参加者には既に配布されていて(Fontes 最新号 55-1 で既報)、その後の1年間の新会長、事務局長、会計の報告があり、(2)事務局長の2010年までの留任がまず承認された。会計は、(3)旧担当だったM.セヴェール新会長から恙なくK.アダムソン(英)に業務が引き継がれ、(4)2010年からの会費値上げについて若干の修正(団体会費Euro1追加申請でEuro60、個人会費0.5追加でEuro36)提案があり、総会でも承認された。ユーロ高などすべて物価高騰でやむなしとの判断があり全体で2%弱の追加値上げとなる

(5) Fontesの編集長を永く務めたS.ソマーがこの4月に長年の闘病の末逝去(享年73才、ニューヨーク市立図書館演奏芸術部門に属し、MLA機関誌Notesの編集にも携わった)。先年亡くなったL.コーラルと共にパワフルな米国ライブラリアンの典型であった(6)3年毎の名簿は今年刊行予定(7)RISM運用のために、Commission mixteと称する新たな強化体制が出発した。これは、IMS、IAMLそして出資出版者からなる委員会を総合呼称し、前二者から5名ずつ委員を出し、5年毎にメンバーを部分変更することとし、一連のRISM処理手順を分担し、活動全体の財政基盤を確保としていくことが諮られている。以上がカウンシル初日の主要項目。

ナポリ音楽院図書館見学～オープニング

オープニング・セレモニーまでを音楽院図書館見学に充てた。出かける前にその存在を金沢支部長から伺っていたのだが、図書館とい

うより、ペルゴレーヅ、チマローザ、ベッリーニ、A. & D. スカルラッティらの肖像画や自筆譜、美しい一級の高楽器コレクションも置かれ、建物の天井や、作曲家の名前を配した部屋毎の施し、楽譜や登録原簿に至る文献ドキュメントのコレクションまで全体が音楽史博物館と云える見事なもの。一巡しただけで全容を語れるものではないが、現在の形で整えられたのは 1970 年代に遭遇した火災のあとで 1996 年(注1参照)とある。学生など通常使われている図書館は別フロアーにある。その後、隣の音楽院と同名のサン・ピエトロ・ア・マジェッラ教会(ナポリ国立音楽院は、もとはこの教会の付属音楽学校)で会議の始まりを告げるセレモニー。日本からの参加メンバーは荒川恒子、樋口隆一夫妻、井上公子、伊藤真理、上法茂夫妻、森佳子、関根和江、関根敏子の各氏と筆者の 11 名。セレモニーの後、音楽院中庭でのカクテル・パーティ、ギター 2 丁のナポリ音楽も奏された。

イタリアの音楽遺産電子化は急ピッチで進行

21 日(月) 会議初日 オープニングセッション ではまず「イタリアの電子図書館における音楽」。カンパニア県文化遺産地域担当官から基調講演がまずなされた。音楽遺産を持つアーカイヴ、音楽図書館の電子化がリコルディなどの出版者所蔵も含め、国家予算で進められている(発表の全容は、注 2 資料参照。詳細を Power Point で開示)。SBN(Service Bibliographie Nationale)は、書誌情報だけでなく、画像の電子化にも関与し、怒濤のごとく急ピッチに電子化が進んでいる。数ヶ月単位で音楽学校の貴重な遺産が、著作権処理などの問題を残しながらも、ともかく収録されつつあることが報告された。ナポリ会議が決まった背景にこれがあったのだと「場」を設けそれを演出することでは追従を許さないイタリア流デジタル・ライブラリーのダイナミズムに圧倒された。2009 年 8 月にはミラノで IFLA 大会も開催。

イタリア半島とアドリア海沿岸のコレクション

研究図書館部会セッションは、「東ヨーロッ

パとイタリアの研究コレクション」、「クロアチアの音楽コレクション」についてザグレブ国立・大学図書館から報告があった。初期音楽コレクションの多くは教会や僧院に属した稀少コレクション、すなわち初期印刷譜、写本の類、シート楽譜コレクション、作曲家が残した資料などで、1980 年以降科学インスティテュートに保管されていて、多くはザグレブにある聖フランシスコ修道会のコレクションを指す。他にもドゥブロヴニクやクルク島にも同修道会コレクションが存在する。首都ザグレブの国立図書館、国立図書館、音楽教育機関、博物館などは、録音資料を含む音楽資料が在る。「モンテカッシーノ大修道院とオルトーナの聖ドメニコ修道院図書館の楽譜アーカイヴ」報告はローマの出版者 Gio.In の G. インソム。近年この二つのアーカイヴ・コレクション目録を出版した。オルトーナはアドリア海に面した半島南部キエーティ県の古い街だが Fr.P. トスティの生誕地でもあり、彼の作品集出版のプロモートも引受けた。

知的所有権と著作権の近況

午後の著作権委員会セッションでは、相変わらずメディアの台頭に伴う知的所有権の図式が優先し、著作権にとって一層複雑な様相を呈しているが(EC は、この 7 月に音楽録音資料の隣接著作権保護期間を 50 年から 95 年にとの延長勧告を欧州議会・欧州理事会に求め、激しい論議が始まっている、等)、それを何とか国際的かつ客観的視野で捉え直そうと、また特に音楽という多くのメディアに関わりの深いジャンルでの問題性を見極めようと、著作権に関するアンケート結果を委員会 HP にアップしている。更新部分の紹介と、ロシアの近況報告が代読された。ヨーロッパとの調和、例外処置について、下院会議で、米国方式に沿う動きが民法化に向け現れ始めているという内容であった。日本もこのアンケートに数年前に応じているが、音楽分野の楽譜複写ガイドラインが公的に存在するには至っていない。街中のコイン・コピー機のように、図書館カウンター脇に、注意喚起もなく無雑作に複写機が置かれている状態は確実に減少し

た。CARS (楽譜コピー問題協議会) の PR 活動が効を奏しているとも云える (注 3abc)。

午後後半は、各国支部報告。近年このセッション報告は、電子ニューズレター (<http://www.iaml.info/publications/newsletter/IAML-NL-29.pdf> 要約既報) や Fontes (全文) に掲載されることとなった。



藤堂氏による支部報告⑧

本年は支部長が会議参加不能であったので筆者が支部長とコンタクトを取りながら報告をまとめた。日本支部の選挙結果、昨年 の 3 団体合同シンポジウム、小川昂氏訃報などに焦点を絞り、支部の関心が音楽図書館のデジタル化とその総合ポータル・サイトに向いていることを表明した。

イタリア：デジタル化各論

22日(火) 全員出席を建前としたセッション「イタリア音楽図書館へのデジタル・アクセスのためのオンライン・プロジェクト」は、ナポリ音楽院の歴史遺産、教育用の二種の図書館について(注1)、トレント大学から、14世紀のポリフォニー手稿譜「トレント写本」(注4)と14世紀から18世紀に跨るイタリアの単旋律聖歌のカラー版デジタル画像を収録した「RAPHAEL」(Rhythmic And Proportional Hidden Actual Elements in plainchant)を紹介(注5)。ヴェネツィア音楽院から、作曲家、詩人、政治家でもあったB.マルチェッロが1876年創設した音楽院の図書館文庫の一部で長年全容把握出来なかった少女合唱団(ヴィヴァルディが40年近く合唱長を務めた救貧院附属女子音楽学校に属する)の未刊のCorrer手稿譜コレクションを、SBN OPACを通じ横断検索することで、パート譜が揃い、演奏や研究に供することが可能となったエピソードなどが報告された。

RILMセッションは、別項のご報告に譲るが、「音楽学対民族音楽：中国の音楽出版最近事情」は、歴史を踏まえたユニークといえる香港バプテスト大学の報告だった。

ナポリの作曲家たちは世界で

午後後半の研究図書館部会セッション2のテーマは「18～19世紀のナポリの作曲家たち：世界のソース」。モスクワに在るグリーンカ国立音楽文化中央博物館は、1840年代にロシアを訪れたイタリア歌劇団の存在、1860年代、ボロディンのボリショイ劇場初演のオペラ・ファルス『Bogatyrri』(セロフの「ユディット」をもじり、マイヤベア、ロッシーニ、オフエンバックを借用し繋げたとされる作品)に含まれるパロディ・ソースとしてのイタリアの作曲家たちがいたこと、シリアスで大仰なドラマティックなオペラ構成が、滑稽さを交えた悲喜劇誕生への第一歩となる手法に転じたことなどを例証した。一方でサンクトペテルブルグマリンスキー劇場図書館から「18世紀後半におけるサンクトペテルブルグの偉大なヨーロッパの作曲家たち」と題し、Galuppi, Traetta, Paisiello, Sarti, Cimarosa, Martin y Solerらを挙げ、王宮音楽家として滞在したイタリアの作曲家たち(My.Solerはスペイン人だが、ボローニャで音楽を習得)の残した知られざる資料が、当マリンスキー劇場のアーカイヴに存在することが紹介された。My.Solerのコミック・オペラ『Fedul with the children』(1790-1791)、Traettaのカンタータ『Astrea Placata』(1770)などである。次いで「パイジエツロとタリランド：『L' astuzie amorse』の発見」についての報告は、ナポリの北東に在る古都ベネヴェントの王子タリランドの音楽遺産(パイジエツロの重要なコレクションを含む)を所蔵しているブリガムヤング大学H.B.リー図書館所蔵の『Le astuzie amorse』自筆譜の紹介。自筆の一部は当ナポリ音楽院でも所蔵。

世界のイタリア自筆譜

23日(水) プログラム委員会によるセッション「国立音大図書館における『秘密の結婚』ナポリ版の発見」日本支部の若手山田高誌氏による発表(別項参照)は、10月4～5日に東京芸術劇場中ホールで同版が初演された。

音楽院 ユニーク・コレクション

音楽教育機関図書館部会の最初のセッションは「音楽院図書館の歴史的コレクション調査」。ロッシーニの遺産で創設され、その名を冠した「ペーザロ音楽院」には、プッチーニ、ヴェルディ、G. クレシェンティーニ（カストラート歌手）ら発信の書簡を所蔵しているが、16 世紀以降の印刷譜や 19 世紀の室内楽なども所蔵。一方、「ナポリ音楽院図書館」には、ジョゼッペ・ドニゼッティ（ガエターノの長兄）のまとまったコレクションを紹介。この兄はオットー率いるオスマン軍楽隊員として渡ったコンスタンティノーブルで、トルコ王モハメド 2 世家の音楽教師を 30 年務め、オスマン・トルコ国歌として演奏されてきたマーチの作曲者でトルコでは著名な人物。1921 年に音楽院に寄贈されたが、インヴェントリーのみ終え、永い保管を経て、近年目録化されナポリ市研究所所蔵となった音楽史上特異なコレクションではある。予定されていた「パルマ音楽院」の A. ボイトーに関する発表は、コレクション所蔵の建物改装のため資料がパッキングされ、ペーパー準備不能となり、今回キャンセルされ、代わりにボローニャの「G.B. マルティエニ（通称パードレ・マルティエニ）のコレクションをオンライン検索するためのツウール」がボローニャ国際博物館音楽図書館から報告された。既に絶版の Gaspari による手稿譜カタログには非収録の画像資料や写真も含み、オンラインならでの研究資料を提供できるようになった。

台本もデジタル化へ

24 日（木）プログラム委員会によるセッションは、ナポリに因んだ発表が多く並び、このセッションもそのひとつ。まずローマ聖チェチリア音楽院から「17 世紀以降の 3 万冊以上の台本コレクション」。オペラ、カンタータ、オラトリオなど古今質量とも世界一の台本刊本コレクション。中でも 16 世紀の Peixoto de Carvalhaes コレクション (21,000 点) と弁護士 Giovanni Carotti のコレクション (3,475 点) は、貴重な 16 ～ 17 世紀コレクションで、内外の要請を受け、DVD に収録した。その変

換経緯は、ラツィオ州が財政補助、音楽学研究者と専攻学生初年度のプロジェクト・チームが画像取り込み作業に参加、作曲者や台本作者の標目入力カタログが分担するタスクホースを組み、DVD 2 枚セットで 1000 点を作成頒布。一方米国カリフォルニア大学バークレイ校図書館では、「Taddei di Ferrara Libretto コレクション」の電子化が間もなく終わろうとしている。このコレクションはイタリア全領域の 1600 年以降 1953 年までのメロドラマで、Sartori のカタログや音楽百科事典にも情報のないジャンルの 4403 点、シシリア・コレクションの 931 点もほとんど未知のレパトリーで OCLC WorldCat 上で簡単にアクセス可能となるとの報告。さらにピアチェンツァ音楽院からジェノヴァの複数図書館（市立、大学図書館を指す）で所蔵している音楽に関連するテキスト・ソースについて証言があったが、まだインヴェントリーも十分ではなく、詳述不能であることが窺われた。

オペラ各論

プログラム委員会によるセッションには他のセッションに入りきれないペーパーがさらに続く。まず、Ricordi 社より、出版社創設 200 年を記念して制作された「ボエーム」と「ファルスタッフ」の電子化デモンストレーション（2010 年 7 月東京でも That's Opera 展覧会で公開予定）。その後シカゴ大学より Ph. ゴセット教授、A.W. メロン財団の協力で 2006 年から始まり 2009 年には稼動するオペラの古書カタログ・オンライン化の進捗が報告され、オハイオ大学元図書館長 Th. ヘック夫妻と Fr. コッティチェリが共同で進めた 1699 年初版の A. ペルッチの Dell' arte rappresentativa...（ナポリのコメディ・デラルテ論の古典）が、ナポリ国立図書館と Scarecrew 社の協力を得て 2007 年に 2 カ国語併記で Web 版公開（注 6）の運びとなっていることも紹介された。

カウンスル 2 補足

午後の後半は、カウンスルの 2 回目、ご報告すべきことのみ記載する。Fontes の電子化

について、選挙の投票の電子化についての特別委員会が設けられたが、双方とも大きな進展はない。年次大会予定について、来年は、アムステルダム(5～10 July)でIMSと同時開催する。IMSのテーマは「記譜と音 Notation and sounds」。その後の予定は以下の通り。モスクワ(2010, 27 June～2 July)、ダブリン(Ireland 2011, 24～29 July)、モントリオール(Canada 2012)、オーフス(Denmark 2013)、ヴィーン(2014)、ニューヨーク(2015)までが決まっている。また長期に渡り紆余曲折のあった Hofmeister XIX プロジェクトが、来年には仕事を終え、ワーキング・グループを解消することが晴れやかな笑顔で Ch. バンクスから公表された。19世紀出版楽譜カタログ(1829-1900. 400,000 records)のデジタル再現(注7)である。

ボローニャ・プロセス

25日(金)少し遅れて音楽教育機関図書館部会の2日目に出席。ECの高等教育改革を指す「ボローニャ・プロセス」は1999年開催のEC教育大臣会議に由来する。EC内の高等教育学生の交流を旨とし、取得単位の互換を助長する動きが制度化し、実施は依然部分的とはいえ、その影響は音楽院や、その図書館にも及んでいる。演奏実技が中心にある音楽院のカリキュラムにとって、単位構成にも影響があり、音楽院学生には不要と思われるドキュメンテーション収集を余儀なくされることの疑問もある。総合大学とは別に、単科高等専門教育機関相互に新たな協力体制を持つべきではないか、という主張、これを機に音楽情報リテラシー教育を単位認定するよう図書館で打って出るのが得策、という意見もある。ボローニャ宣言は6項目に渡り(注8ab)、それを専門音楽教育機関図書館がどう受けとめ、質保証していくかについての意見交換に終始した。各々の学校の独自性の維持との兼ね合いも重要な課題で、急速な改革が各国の自治権の否定に繋がらないよう、拘束性に対する批判や懸念もあるようだ(注8ab)。

今年は各セッションの座長、副座長、事務長の改選の年なので名指して任命されている

プロジェクトや、特別委員会、外部団体と共同している R-プロジェクトを除く全部会・委員会で選挙があったこともお伝えしておこう。

この後、総会、閉会セッションが続いたが、重要項目はカウンスルで既に議題に上り前述しているので省略する。来年の開催地プロモーションは「アムステルダムに行きたい!」と思わせる気の利いたフィルムで会場を沸かせた(注9)。フェアウェル・ディナーはポンペイと同じく一度は噴火で埋もれた海辺の街エルコラーノにある古い館の庭園で催された。

注)

1. The Conservatorio of San Pietro a Majella : musical tradition and art history heritage (artists' guide) Napoli, Electa Napoli, 2008 ISBN: 978-88-510-0516-0
2. http://www.iaml.info/files/naples2008_music_in_the_italian_digital_library.pdf
- 3a. <http://current.ndl.go.jp/node/8339>
- 3b. <http://www.iaml.info/organization/committees/copyright#activities>
- 3c. <http://www.cars-music-copyright.jp/index.html>
- 4-5. IAML e-Newsletter no. 29 p.24~29 に掲載 : <http://www.iaml.info/publications/newsletter/IAML-NL-29.pdf> IFLAの図書館・アーカイブのためのデジタル・プロジェクトへのガイドラインも含む有益な URL 満載
6. <http://digitale.bnonline.it/perrucci/indice.htm#info>
7. <http://www.hofmeister.rhul.ac.uk/cocoon/hofmeister/index.html>
- 8a. ec.europa.eu/education/policies/educ/bologna/bologna_en.html
- 8b. ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/metadb/up/kiyo/AN10281005/Hiroshima-IntStudentCenter-kiyo_16_21.pdf
9. <http://www.iamlconference2009>

(とうとう やすこ 副支部長)



カステルデローヴォ(卵城)にて

RILM (国際音楽文献目録委員会)

関根敏子

RILM 日本支部／音楽文献目録委員会は、財政難のためここ2年ほど IAML 国際大会において開催される RILM 各国支部連絡会議への代表派遣を中止していた。しかし今年度 [2008] から国際本部への文献送付にあたって本部の新入力システム「iBis」を用い始めた結果、さまざまな利点と問題点が出てきたこともあり、代表派遣を復活し、本年 [2008] 7月にナポリで開催された国際会議に関根敏子(事務局長)が出席した。以下は、RILM 部門に関係した会議および行事の報告である。

7月21日(月曜日) ワーキング・ランチ

各国支部関係者のみが集まる非公式の会で、17の支部から26人が集まった。日本支部からは樋口隆一委員長夫妻と事務局長(関根)が出席。会場では、ランチボックス(サラダ、ハンバーガー、飲み物)が配られ、とても和やかな雰囲気が漂っていた。そして全員が輪になってすわり、ひとりずつ英語で自己紹介し、個々の支部の活動や問題点などについて語り合う。ふだん別々に行動する各国支部メンバーが顔をあわせることで、RILM が国際的な協力活動であるという共通意識をもつことができる点でも有意義な企画だと思われる。

7月22日(火曜日) 公開セッション

会期中に RILM の正式会合は2回。ひとつは公開で、もうひとつは実務担当者のみ。公開セッションでは、国際本部からの活動報告に加えて、開催地のイタリア支部、そして中国支部からの報告があった。以下はその要約である。

(1) RILM 編集長 Barbara Dobbs Mackenzie による 2007 - 08 の活動報告

冊子体の第33巻が発行され、秋にはさらに2巻が出版予定。各国支部からの文献送付も積極的で、過去最高の数字に達した(文献総数 15,480、この10年間の平均は年

10,500 - 14,500)。その結果、国際センターのデータベースも前例のないほど増大している。編集作業も順調である。オンライン登録数も増加し、財政的にも安定してきた。

RILM の新しいウェブサイトが完全リニューアルされた。たとえば従来の検索ページばかりでなく、RILM の歴史や現状についてのセクションもある。また分野別の割合が円グラフを添えて提示されている。さらに、サイトの要訳が現在 10 ケ国語で見ることができ[注：日本語はまだない]。新登場は執筆者の入力フォームで、ユーザー ID とパスワードを登録すれば、自分の論文を直接チェックすることもできる。現在、RILM のデータベースは、EBSCO, NISC, OCLC, Ovid/SilverPlatter, Proquest/CSA などを通じてインターネットで検索できる(有料)。各国支部(現在 55)とそのメンバーについては <http://rilm.org/globalNetwork/index.html> に掲載されている[注：日本支部 Japan には委員長と全委員および事務局長の氏名などが、漢字とローマ字で出ている]。支部は、東南アジア、中近東、中央アジア、インドなどへと広がっている。国際センターでは文献情報の収集に全力を尽くしているが、そのためには各国支部の協力を得ることが不可欠である。

(2) イタリアの RILM 目録を読んで：目録の歴史と傾向

発表者 Pinuccia Carrer (ミラノの「G. ヴェルディ」音楽院) は、9年ほど RILM の作業に携わっている(写真参照)。



イタリア支部の活動は活発だが、その道は決して平坦ではない。ここ数年は以前ほどの活気はなかったが、来年度は助成金が得られる予定なので、学生グループを指導して積極的な活動ができると思う。文献の多くはイタリア音楽学会発行の「Le fonti musicali in Italia」の情報から得ているが、最近ではウェブサイトからも収集している。イタリア支部では、イタリアの音楽学文献の 80% を把握しており、ここから 1970 年以後

の研究動向を見ることができる。

1970年以前は大作曲家に焦点があてられていたが、RILM目録には重要な変化が見出される。イタリア音楽史は大小の星からなる銀河のようなものであり、最近の著作や論文の多くは、マイナーな作曲家や地方小都市の音楽活動を研究の焦点としている。その結果、地方行政は歴史遺産を評価し、劇場など素晴らしい建築に新しい生命を与えるようになってきた。RILMに見出される最新の文献タイトルにはイタリアの地方や地域名が多く、研究の細分化を示している。

RILMに見出される主題でもうひとつ重要なのは、教育である。イタリアの学校の枠組みでは、音楽教育は主要科目と考えられていない。その代わりに今もなお「町の音楽」が存在しており、音楽愛好協会の歴史には多くの学生が興味を示している。1980年代には、幼稚園や小学校における音楽教育という主題が目撃されたが、最近では減少している。音楽院や大学では、高度な専攻論文を含む紀要や単行本が好んで発行されているが、もっと科学的な基礎研究が出てきてほしい。

今後の重要課題として2つのテーマを挙げておく。ひとつは、女性が作曲した音楽もしくは女性に関するもの。RILMでの研究は20年前に比較すれば3倍に増えている。もうひとつは、楽器学である。これは本当に興味深いものであり、今や演奏実践と密接に結びついている。今後は、分析（たとえば修辞学的分析など）、音律、イタリアの作曲史における20世紀、辞典（出版社に関する新しい研究）などの新しい研究も増えるであろう。最後に、カタログ（楽譜所蔵目録や主題目録）が増加していることも付け加えておく。

(3) 音楽学対民族音楽学：中国における音楽出版の最近の傾向

発表者のDr.Ching-wah Lam氏は、香港大学(Hong Kong Baptist University)の教授で、アメリカのインディアナ大学で博士号を取得している。発表はパワーポイントを用い、背景に万里の長城の写真、さらには漢字書体の種類などを写し出すなど工夫を凝らしていた

(写真参照)。

音楽は古代中国で儀式と結びついて重要な役割を果たしていた。出版の歴史も長い(3世紀頃にはすでに美学的著作もある)。7世紀頃からは上流階級や音楽愛好家のための本も出版されている。20世紀には、政治的道具として音楽を利用するというソビエト連邦の発想が、中華人民共和国の初期リーダーたちによって、民族音楽の重要性に焦点をあてたプロレタリアート実践に採用された。それはまた、外国音楽との壁を作ることであった。こうした状況のもとでは、中国音楽が最高の位置を与えられていた。それは、1950年代の西洋において西洋芸術音楽と民族文化の音楽に分けることへの議論がなされていたのとは対照的である。

一方、中国における音楽研究は、1950年に中央音楽院が創設されてから西洋芸術音楽と同じようなレベルを目標として奨励された。北京や上海など8ヶ所に音楽院が創設されたが、活動の中心は中国民族音楽にあった。また、中国音楽の位置を高めようとする真剣な試みが始まったが、そこでは民族音楽学が音楽学と一緒に考えられていた。たとえば音楽学には中国音楽史(オペラも)と西洋音楽が含まれ、民族音楽学には地方オペラ、民俗音楽、少数民族の音楽、宗教音楽(仏教音楽)などが含まれていた。西洋音楽関係には、林健三の楽器学やヒンデミットの作曲技法などの翻訳、ベートーヴェンやリストなどの伝記、



さらには音楽愛好家むけの教則本、ダンス、鑑賞、グレード試験用の著作なども見出される。

中国における音楽出版は、北京の人民音楽出版社と上海の上海音楽出版社が中心で、他はそれほど重要ではない。最近では、台湾国立伝統芸術センターが音楽出版目録を発行することで同じ道をたどっているが、その中心は雑誌記事にあり（音楽雑誌記事一覧 1950-2000、CD-ROM として 2004 年発行）、中国音楽が主要な位置を占めている。

中国での音楽出版は、まだまだ国家に統制されてはいるが、市場やグローバル化を考えると、中国と西洋の音楽文化の間にバランスをとろうとしている。だが、著者を見ると、有名な教授ばかりで若い人には機会が少なく、質的にもまだ問題が残る。

7月23日（水曜日） RILM 各国支部のためのビジネス・ミーティング



各国支部の実務担当者の会合であり、国際本部の入力システム「iBis」について活発な質疑応答がなされた。しかしその内容は実践現場にのみ有用であり、詳細多岐にわたるので、ここでは省略する。なお、国際本部の3人が多種多様な質問に対して真摯に耳を傾け、率直に答えてくれたことを付け加えておきたい。



左はマッケンジー事務局長、中央は関根敏子氏 ㊦

7月23日（木曜日） 午後9時 RILM 主催の親睦会

水曜日夜の9時からRILM国際本部の主催による、ナポリのスパッカナポリ地区にあるレ

ストランで親睦パーティーが開催された。（写真参照）

この親睦会は10年ほど続いている。最初は、フランスのペリゲーであったろうか。路地に並んで夜更けまで賑やかに飲みかわした。その時に隣り合わせたニュージーランドとチェコの男性に、持参の瓶（ミニチュア）を差し上げたら、今もパソコンのそばに飾っているという。この集まりでは、筆者の留学時代からの知り合いであるフランス勢に加えて、フィンランド、ポーランド、ルーマニア、エストニアなど世界各地の支部代表者との歓談を通じて友人が次第に増えていく。今回2年ぶりに参加した筆者だが、懐かしい顔ぶれが暖かく迎えてくれた。

このようにRILM国際本部では、各国支部間の親交を深め、国際協力による共同作業という意識を高めるための素晴らしいアイデアを次々と披露してくれている。だが、RILM国際センターの役割はそればかりではない。毎年、展示場には必ずRILMのブースを設置し、会議参加者の質問に答え、RILMの宣伝やユーザーの獲得に努力しているのである。

（せきね としこ 音楽文献目録委員会事務局長）



ナポリでの RISM 国際会議

樋口隆一

ナポリでの IMAL 年次総会に参加した。正式には RILM の日本国内委員長（音楽文献目録委員会委員長）としての参加であるが、今回は関根敏子事務局長も参加してくれたので、RILM 関係の報告は関根さんにお任せして、RISM 関係のみに的を絞って報告したい。現在日本には RISM 委員会が存在しないが、同じ R プロジェクトのひとつであり、関心を持ってフォローしてきたところ、昨年 [07] から RISM 内部の国際会議にも招待されるようになった。RISM 国際会議は IAML の年次総会とは別に開催されるので、これまで日本にはなかなか実情が伝わりにくかった。昨年 [07] は、チューリヒの IMS 世界大会と並行して近郊のアインジーデルンで開催されたが、今年 [08] は IAML の年次総会の翌日、同じナポリで開催された。来年 [09] は IMS と IAML 合同のシンポジウムがアムステルダムで開催されるので、やはりその周辺で開催されることが予想される。内部の情報交換と親睦を主たる目的としているためか、クローズドで行われている。



オープン・セッション

もちろん IAML 年次総会の中でも、RISM 関係の会議は行われる。7月24日(木) 11時から RISM(Open session)が行われ、多くの参加者があった。この内容は、クラウス・カ

イル所長によるいわば事業報告が中心であり、入力プログラム「カリスト」Kallisto や、現在有料のデータベースが 2009 年度中にバイエルン州立図書館のサイトから無料公開されるといったことで、すでに昨年の報告に書いたことと大差はなかった。翌 25 日(金) 11 時



カイル所長夫妻

からは合同委員会 Commision Mixte (Closed meeting) が行われた。各国の委員の意見を聞きたいという趣旨ではあったが、特に議題もなく詳しくは翌日という感じであった。実はこの日はすでに朝の 9 時から理事会が開かれており、クリストフ・ヴォルフ会長ほか幹部の皆さんもかなりお疲れの様子であった。ロシアの代表から、カリストのマニュアルのロシア語版を製作中との報告があった。

翌 26 日(土)、ナポリ音楽院の近くに



会場となった教会。右は合唱のコンサート

ある古い教会、サンタ・マリア・マッジョレ Basilica di Santa Maria Maggiore で、RISM 国際会議が開催された。ここは 23 日(水)の夜に現代イタリアの合唱曲を聴かせてくれた合唱団アンサンブル・ヴォカーレ・ディ・ナポ

りの本拠であり、会議の会場にはこの合唱団の練習室が提供された。朝の 9 時 15 分から夕方 6 時 30 分まで、冷房もない教会の 1 室での会議であった。

ヴォルフ会長の挨拶のあと、午前中は、顧



ヴォルフ会長

問会議 Beiratsitzung ということで、RISM の運営について議論された。各国の委員会、つまり現場の意見を運営に反映させたいというヴォルフ会長の姿勢の表れと評価はできるのだが、実務に追い回されている現場の人たちとしては、面倒なことはなるべく避けたいので、そんなことは必要ないという。そんな押し問答を延々とやられたのには多少閉口したが、本部がフランクフルトにあり、運営資金もドイツから出ていることもあって、ドイツ中心に固めざるを得ない理事会には、なにかと批判もありそうだ。ドイツ人でありながらアメリカのハーヴァード大学教授でもあるヴォルフ会長としては、そうした批判をかわして円滑な運営をめざすことが必要なのだろう。

教会の前の小さなピザ屋での楽しい昼食のあと、ドイツ、イギリス、スペイン、イタリア、スイス、オーストリア、スウェーデン、オーストリア、チェコ、ベルギー各国代表の報告ない



し発表が行われた。



ドイツは、フランクフルトに本部があるほかに、東西分裂時代のなごりでドレスデンとミュンヘンに支部がある。ミュンヘンの支部長であるバイエルン州立図書館のアルミン・ブリントングの報告は、同図書館のサイト VIFA MUSIK を使った RISM データベースに関するものが中心であった。2009 年中の公開に向けて努力中とのことであった。

イギリス支部の報告は、ブリテイッシュ・ライブラリーが 6 年かけて行った 66,000 点の音楽資料 (1600 年～ 1800 年) のカタログ化のプロジェクトが終了したということであった。このプロジェクトによって、所蔵資料の約 3 分の 2 のカタログ化が終了したが、まだ 3 分の 1 にあたる約 33,000 点が残っており、新たな資金源が求められているとのことだった。イギリス支部のサイト (<http://www.rism.org.uk>) を見れば、インチピット、作曲者名、タイトルによる検索が可能であり、インチピットは画像で見られるだけでなく MIDI ファイルによるプレイバックも可能である。

スペイン支部の報告は、代表欠席のためカイル所長が代読。スペインとしてはその特殊



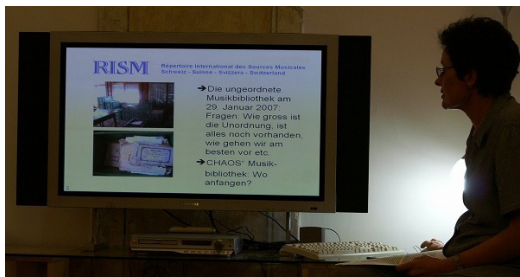
性によって、アメリカとヨーロッパの架け橋となりたいたいという主旨であった。

イタリア支部の代表はジョヴァンニ・インソム。昼食の席が隣だったせいで「ドイツ語が



うまいだって？」などと親しげに話しかけてくれた人だ。彼もミュンヘンに留学したとかでドイツ語が上手だ。発表は英語だったが、いかにもイタリア人らしく、1988年以來20年にも及ぶRISMとの協力関係を雄弁に語った。サン・ジョヴァンニ・イン・ラテラーノやサンタ・マリア・マッジョレのようなローマの大教会の音楽資料をカタログ化したあと、モンテカッシーノ修道院やオルトーナのサン・ドメニコ図書館のカタログ化をやったという。2007年春からは新しくできたRISMソフトのイタリア語バージョンを製作中とのことだ。今回は、開催国ということもあって、イタリア人の元気の良さが目だった。中世・ルネサンス以來の膨大な資料のカタログ化、デジタル化が急速に進みつつある。

昨年[07]の開催国だったスイス支部の代表はガブリエラ・ハンケ＝クナウス女史。「スイス



の修道院の音楽」や「19世紀スイスの作曲家のレパートリー」といった研究プロジェクトとカタログ化をうまく組み合わせている。スイス支部は、さまざまなプログラムのデータを統一的

に管理するインフラの整備の面で、RISMの仕事を手けている。ローラン・プギンの報告は、昨年[07]同様、データ管理をより簡単に行う新しいプロジェクトについてだったが、これは正直のところ高度なコンピュータの知識がない筆者には理解しがたいものだった。

オーストリアは、ウィーンの支部のほか、インスブルックとザルツブルクがそれぞれ独自の活動を展開している。インスブルックは、「RISMチロール/南チロールおよびオーストリア・フランシスコ地域」という音楽学研究プロジェクトを推進している。昨年[07]の会議では大規模な報告があったが、今回はカイル所長によってその継続が報告された。

スウェーデンは、スウェーデン各地の教区学校に所在する1650年以前の資料にみられる作者不明の作品のカタログ化を試みている。その目的は(i)問題ある作者名を正すこと、(ii)世界中にあるさまざまなコレクションの間のコンコードダンスを作ること、(iii)散在するパート・ブックの統合、(iv)これまではRISMに登録されていなかった資料を捜し当てることである。今後の国際協力による進展が期待されている。

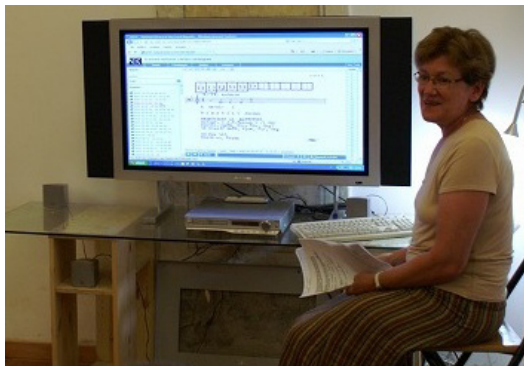
ザルツブルクのエファ・ノイマイヤーとラルス・ラウプホルトは、「大聖堂の音楽」のカタログ



化と、それに付随するふたつのプロジェクト、すなわちザルツブルクのコピストたちの筆跡、ザルツブルクで作られた紙の「透かし」のデジタル化について興味深い報告を行った。

チェコの代表はプラハのズザナ・ペトラスコヴァ。彼女の報告によれば、チェコ国立図書館は、チェコ共和国内に所在がある180の音楽コレクションに含まれる音楽資料のファイルからなる「総合音楽カタログ」を有しているが、

それらはいまだに古典的な紙のカタログ・カードに書かれたものである。第 1 次資料の研究には「インチピット・カタログ」が有用であり、このカタログは同図書館のサイト (<http://www.nkp.cz>) でも利用可能とのことである (た



だし、このサイトはチェコ語で書かれているので、チェコ語を解さない筆者には検索不能であった。「カリスト」は今年中に導入される予定で、紙のデータの電子化を進めたい。チェコ共和国の図書館は、「カリスト」と、一般的な図書館用プログラム MARC21 との間での相互の変換を可能としたい、とのことである。

長い一日の最後を飾ったのは、ベルギー支部のウジン・シュールの報告であった。2006 年～ 08 年、フランドルの RISM は 4 つのプロジェクトを完成させた。18 世紀のカリオン音楽 (ルーヴァン)、18 世紀の minstrel 音楽 (アントワープ音楽院)、19・20 世紀のトンゲレン音楽協会 (ベルギー政府、トンゲレン市)、メケレン大司教区アーカイヴが所蔵する 3 つのコレクション (ベルギー政府) の 4 プロジェクトは、すべてルーヴァンの「レゾナ

ント」(フランドル音楽遺産研究センター) によって監督された。今回の報告は、それのうち特に minstrel 音楽について行われた。Minstrel 音楽は 1 本ないし 2 本のヴァイオリンのための小冊子として残された。メケレンのコレクション(1701 年～ 14 年)は、イタリア(ローマまたはナポリ)で、メケレンの聖シシリア音楽協会会員だったヴァンデン・ブランデン・デ・レートという貴族の依頼によって筆写されたものである。この人物は後年(1739 年)、この楽譜コレクションをメケレンの聖ロンボウト司教座聖堂参事会に寄贈した。全 139 曲のほとんどは作曲者不詳だが、その中にはファーゴ、ロッティ、ポルポラといった作曲家の作品も含まれている。

日本支部は現在存在しないため(約 30 年前に日本音楽学会によって作られたようだが、自然消滅したらしい)、筆者としては公式の発言は控えてきたが、最後に一言発言させてもらった。それは筆者が現在作成中の「カリスト」日本語マニュアルのことである。オリジナルはドイツ語だが、2008 年 3 月には英語版が公開され、現在、ロシア語版、イタリア語版も製作途上にある。もし日本語版が完成したら、これらと同様に RISM の HP に掲載してほしいと提案したのである。嬉しいことに、カイル所長ほか大方の賛同を得られた感がある。猛暑のナポリでの国際会議はかなりハードな体験ではあったが、今、世界の資料研究の現場では何が起きているかを肌で感じる事ができたのは収穫であった。

(ひぐち りゅういち 音楽文献目録委員会委員長、
明治学院大学)



サンタルチア港付近を散策

音楽図書館情報学のための研修プログラム構築について

伊藤真理

本稿は、IAMLナポリ大会での公共図書館部会の作業部会（公開）での発表報告である。発表内容の中心は、音楽図書館情報学の研修プログラム構築のために行った質問紙調査の結果である。この研修プログラムは、音楽分野の専門情報を扱うための自学研修を目的としている。本プログラムは、音楽図書館員養成のための専門的な教育カリキュラムが提供されていないために、音楽図書館情報学について学ぶことが困難な状況にある地域で、音楽図書館員としての基礎知識を学習できるような内容を盛り込むことを検討している。研修プログラム構築の背景として、この数年間欧米各国からのIAML会議の参加者に確認したところ、日本だけでなく、アメリカ、ドイツなどを除くほとんどの国で、大学機関で音楽図書館情報学の教育カリキュラムが提供されていないことが明らかになったためである。しかし、英国のように、大学機関での教育カリキュラムはないが、図書館団体による研修プログラムが充実している国もあることは注目したい。

本プログラムはまた、基礎レベルの対象を一般の公共図書館員に設定することを検討している。公共図書館では、音楽図書館員ではないにもかかわらず、日常業務で音楽に関するレファレンス質問を受けることも多い。特にAV資料に関するサービスは、一般に普及している。そこで、このような一般の図書館員向けに、音楽分野の情報を扱うための基本的な知識とスキルを学ぶためのプログラムを基礎レベルとして提供する必要があると考えている。そのために、まず公共図書館の事情が把握でき、同時に音楽分野のスペシャリストとして勤務している公共図書館の音楽図書館員を対象として調査を行った。その結果を今回の公共図書館部会で発表した次第である。

質問紙調査は、2007年IAML会議の公共図書館部会作業部会において、参加者に口頭

で調査協力を依頼し、IAML公共図書館部会のウェブページにある“IAML Toolbox”で質問項目を提示した¹。その後、2007年会議参加者に対して個別に電子メールで協力を依頼した。質問項目は、次の5点であった。(1) 音楽図書館員として必要とされる知識とスキルについて、(2) 公共図書館員として必要とされる知識とスキルについて、(3) 自国で提供されている研修や教育プログラムと(4) その主催者、(5) 外注している図書館サービスについて、である。この調査は、研修プログラムの内容を検討するために、現職図書館員が必要であると認識している事項を洗い出し、そこから具体的な内容を検討するための予備調査である。調査結果の詳細は、上記Toolboxで公開予定である。

回答者は9カ国（アルメニア、オーストラリア、フランス、ハンガリー、ノルウェー、ポーランド、シンガポール、南アフリカ、英国）から13名であった。ここでは、調査結果の主要な点を記す。

(a) 必要とされる知識やスキルについて、音楽図書館員と公共図書館員に共通するもの

下記は、調査質問(1)と(2)に共通して出てきた回答である。

- ・外国語（少なくとも英語）
- ・著作権
- ・デューイ十進分類法
- ・データベースについての知識
- ・一般的な検索知識とスキル
- ・ITスキル
- ・蔵書構築に関する知識
- ・音楽への強い興味
- ・楽譜が読めること（音楽についての基本的なレベルの知識）
- ・複数の関連学問分野についての一般的な知識：音楽社会学、音楽心理学、芸術など
- ・利用者に対して常に理解しようとする姿勢

(b) 必要とされる知識やスキルで音楽図書館員に固有なもの

ここでは、調査質問(1)のみに出てきた回答をあげた。

- ・ 何かの楽器が演奏できること
- ・ 民族音楽、民謡に関する知識
- ・ 音楽関連企業での経験
- ・ 音楽目録整理の知識

(a) と (b) を比較すると明らかなように、音楽図書館員には音楽の基本的な知識というよりもさらに幅広い音楽に関する知識が要求されている。音楽関連企業での経験といったことも役に立つという回答もあった。また、音楽資料の目録整理についての知識は、音楽図書館情報学では重要な専門分野の一つであるが、音楽図書館員にとっては必要であっても、一般の図書館員にとっては特に必要であるとは認識されていなかった。音楽資料の目録整理は複雑であり、専門性が高い業務であると理解されていることが推測できる。公共図書館員にとって必要なのは、こうした専門性の高い知識よりも、データベースに関する情報や、検索の知識やスキルであった。コンピュータ技術のスキルとあわせて、さまざまな情報を取り扱うスキルを持つことが優先されていることが分かる。

調査者にとって意外であったのが、ローカルなニーズへの対応に関する回答がほとんど見られなかったことである。公共図書館の音楽主題専門図書館員に対する調査だったので、民謡などその地域に関する情報についての知識の必要性が強調されることを予測したが、民族音楽や民謡に関する知識と回答したのは、音楽図書館員にとって必要な知識としてあげられた 1 件のみだった。

(c) 研修プログラム

回答者らの国では、公的な教育プログラムは提供されていなかった。各国ともに国内で音楽図書館サービスに関して、何らかの研修が行われているようであった。図書館員自身が自己研鑽しなければならないという回答も複数あった。

フランスと英国では、図書館団体による充実した研修プログラムが用意されており、活用されていることが分かった。特に英国では、IAML UK&Irl 支部によってさまざまな図書館

員のレベルに合わせたプログラムや研修資料が用意されている。講師が直接各図書館に向いて、その図書館の蔵書に合わせた研修も行っている。また、研修資料のいくつかは支部のウェブサイトから入手可能である。オーストラリアでは、UK&Irl 支部の研修プログラムを活用しているようである。

(d) 外注されているサービス

日本ではかなりの割合の図書館業務が外注される傾向にあるが、回答者らが所属する音楽図書館ではまだ図書館業務の外注はそれほど多くなかった。複数の回答があったのは音楽資料の目録整理業務のみで、その他の外注業務には CD や楽譜の継続発注、製本・修理、Alexander Street や Naxos などのオンライン音楽サービスとの提携があげられた。

質問紙調査結果から、一般の図書館員にとって重要なのは、コンピュータ技術やデータベース検索に関する知識を基礎として、楽譜が読める程度の音楽の知識を持つことであることが明らかとなった。また、ほとんどの回答者が著作権についてあげており、これについては必要性が高いことが分かった。このような知識やスキルは、本調査では国の違いによる傾向は特に見られず、共通しているものと判断できるものであった。さらに、必要とされる知識やスキルについて外注されているサービスと比較すると、音楽分野の専門的なサービスについては図書館員が担っていかなければならないことが明確となった。しかし、調査結果から、音楽資料の目録業務など専門性の高い業務については、一般の図書館員ではなく音楽図書館員が行うべきであることが推測できた。そのため、研修プログラムにおいてもこうした専門性の高いサービスについては、一般図書館員向けの基礎プログラムではなく、音楽図書館員向けのプログラムに組み込むことが必要であろう。音楽図書館員養成については、大学機関での教育カリキュラムが参考になる。北米の音楽図書館学教育については、Morrow 氏による概説があり²、アメリカ音楽図書館協会のウェブサイトにてディレクトリがあ

る³。

発表の最後に、一般の図書館員に必要とされる知識やスキルに関するプログラムについて提案した。内容に関しては、IAML UK&Irl 支部が提供している「First stop to music」⁴を参考にした。

会場から、「First stop to music」について、UK&Irl 支部が実践している状況について補足説明があった。また、本質問紙調査結果が公共図書館部会にとって有用な情報になることとその結果の公開を求める発言があった。プログラム構築にあたっては、Wiki を用いることも考えられるのではないかという提案があり、有意義な質疑応答となった。

参考文献

¹ IAML Toolbox. "Questionnaire on music librarianship education" Available from URL: <http://www.iaml.info/activities/public_libraries/iaml_toolbox/questionnaire_2007> (accessed 2008-08-02).

² Jean Morrow. Education for music librarianship. NOTES, 2000, vol. 56, no. 3, p. 655-661.

³ Music Library Association. Directory of library school offerings in music librarianship. Available from URL: <<http://www.musiclibraryassoc.org/employmentanded/libschdir.shtml>> (accessed 2008-08-02).

⁴ IAML UK&Irl Branch. First stop to music. Available from URL: <<http://www.iaml-uk-irl.org/>> (accessed 2008-08-02)

(いとう まり 愛知淑徳大学)



Ⓜ

ナポリ大会での発表について

山田高誌

筆者は、本年度の IAML 年次国際大会(於ナポリ)、一般研究部門において発表を行ったので、以下に発表要旨、およびその成果について簡単に報告させて頂く次第である。



山田高誌氏 Ⓜ

発表内容は、タイトル「The New Neapolitan Version of Il Matrimonio segreto (Napoli, 1793), discovered at Kunitachi Music College in Tokyo」に記される通り、国立音楽大学コレクションに発見された、チマローザの《秘密の結婚》(1792) のナポリ初演(1793) 向け筆写譜の発見報告である。

筆者は同テーマでの発表を、既に IAML 日本支部例会(国立音楽大学、2005年5月14日)、第12回イタリア音楽学会全国大会(ペーザロ音楽院、2005年10月21日:イタリア語での発表)、および、日本ロッシェニ協会『ロッシニアーナ』vol.28, pp.1-33. (2005年12月31日発行) などにおいて重ねてきたが、今回の発表は基本的にはそれを基調としながらも、2005年度の上記報告以降、断続的に行ってきたナポリ銀行歴史文書館での調査の成果を加え、新たな形で公表するものであった。

具体的には、これまで明らかになっていなかったチマローザの契約文書はじめ、レチタティーヴォ部分の作曲家の特定、1793年のフィオレンティーニ劇場所属の作曲家、全歌手、全オーケストラ楽団員氏名とその賃金、劇場関係者、そして観客、さらにはチケット価格を新たに提示するものであり、これによって、国立音楽大学の新史料、さらには、1793年のナポリ初演の「コンテキスト」全体が明らかにされたのであった。

またこの発表には、新史料の提示のほかにもう一つの目的があった。それは、この発表で扱った国立音楽大学所蔵の「ナポリ版楽譜」

に基づく世界復活初演(東京室内歌劇場主催、東京芸術劇場中ホール、2008年10月4日、5日)の予告を行い、日本の音楽学の「広がり」を国際的にアピールするものであった。

なお筆者は、この「初演」に向けて、当該箇所オーケストラ譜、パート譜を作成し、演奏を準備したほか、オペラ上演とあわせて、日本音楽学会関東支部特別例会企画(シンポジウム「『秘密の結婚』の成立と伝播—ロンドン、パリ、ウィーン、そしてナポリ(司会:長木誠司、発表者:高橋宣也、森佳子、松田聡、山田高誌)」(立教大学、2008年10月4日)、および研究冊子『チマローザの世界』(日本イタリア古楽協会、2008年10月4日発行)の出版を行っている。

以上、日本の新史料をナポリの史料から位置づけ、その成果をナポリ、さらには日本へと還元するこの研究発表は、会場にいらした皆様から暖かく受け入れられ、特に、前ローマ大学教授で現ヴェルディ研究所所長・ピエールルイジ・ペトロベリ教授、パリ国立図書館諸氏からは、わざわざ挨拶とコメントを頂戴することができた。

この「成功」はもちろん、今回の「日本団」を率いていただいた藤堂雍子 IAML 日本支部副会長、IMS 日本代表・樋口隆一教授はじめ、来ナポリの日本支部会員諸氏(全10名)の応援による賜物でもあり、この場を借りて皆様にお礼を申し上げたい。

最後となるが、上記ナポリ大会での発表成果は、筆者編著の研究冊子『チマローザの世界』において公表されることとなった。冊子ご希望の方は、筆者、あるいは IAML 日本支部まで問い合わせ頂きたい。

(やまだ たかし 音楽学)

ナポリ紀行—IAML 国際会議に参加して 森佳子

去る 2008 年 7 月 20 日から 25 日まで、ナポリにて行われた IAML 国際会議に初めて参加した。日本では暑くて一番辛い時期であるが、湿気のないヨーロッパはたとえ暑くても気持ちがよく、しばし逃げ出すには最適の旅である。しかも貴重な参加補助費を使わせて頂き、物価の高い今年 [08] の夏のヨーロッパ旅行をするにあたっては大変ありがたかった。また予期せず支部の会計担当となった私にとって、本部会計の Kathy Adamson 氏をはじめいろいろな方々にお会いして、本部の雰囲気を実際に感じる事が出来たのは収穫であった。

ナポリで行われると聞いて、むろん以前から今年こそはと考えていた。フランスをフィールドとするオペラ研究に数年に渡って専念している私にとって、それと関係の深いナポリは長年の憧れの地である。もちろんイタリア・オペラそのものが他のヨーロッパの国々に与えた影響は計り知れないが、その中でもナポリ発祥のオペラ・ブッフアはパリにとって特別な存在である。例えば、フランスオペラ史上大変重要な「ブフォン論争」(1752—54)はペルゴレージの《奥様女中》パリ上演をきっかけとするが、それ以来パリで爆発的にオペラ・ブッフアが流行し、それによってオペラ界の一大改革が引き起こされたことはよく知られる。人的財産についてもパリはナポリの恩恵を受けており、この地からパリへ行った音楽家は少なくない。またペルゴレージ以外にも、ナポリ人作曲家がパリに大きな影響を与えた例は数多いが、「論争」にからめて1つ挙げるなら、《良い娘》で名高いオペラ・ブッフアの作曲家ピッチンニについて触れておこう。ナポリの大使を通じて彼をパリに呼んだのはデュ・バリー夫人であったが、彼女はグルック支持者であるマリー=アントワネットに対抗していた。その結果、論争好きのフランス人の間で再び「グルック・ピッチンニ論争」(1777—79)が起こったという。ピッチンニはマルモンテルからフランス語を学び、フランスでは悲劇の分野でも貢献したが、

論争に疲れてしまい、すぐに故郷へ帰ってしまったという。とはいえ、彼がパリに残した音楽的遺産は大きい。

もっとも、そのような事実を知るまでもなく、パリジャンが本当にナポリ発の音楽を愛したというのはパリ・オペラ座の正面玄関を見れば一目瞭然である。表側に彫ってある文字と人物の顔は向かって左からバッハ、ペルゴレージ、ハイドン、チマローザの順になっており、驚くべきことにドイツの大家の名とオペラ・ブッフアの作曲家の名が並列されているのだ。これは日本では考えられないことではなからうか。

さて、今年の会議の内容は期待に違わず、オペラの話も満載であった。もともと情報収集力を得たいと思って IAML に入会した私であるが、「情報化」は音楽学の世界でも驚くべき速度で進展しており、オペラもその一部に確実に組み込まれつつあることを実感した。例えば 22 日午後の ODE-Opera Discography Encyclopedia (Carlo Marinelli)、24 日午前中に行われた Libretti on DVD opera presented in Rome(sec.17-19) preserved in the Santa Cecilia Conservatory Library のようなプロジェクトの紹介があったが、どれも大変刺激的なものであった。オペラは総合芸術であるがゆえに、その研究が立ち後れていることがしばしば指摘される。すなわち台本と楽譜の類いが各種存在するだけでなく、バレエ、演出や美術等の視覚的要素がそれに加わり、その上、上演に際してはさまざまな理由からある程度の「自由度」が認められることによって、ますます研究を困難にさせているのである。例えば前者のようなプロジェクトにより、あらゆる音源ソースに誰でも自由にアクセス出来るようになれば、20 世紀以後のオペラ上演史の研究に大きく貢献するだけでなく、上演におけるその「自由度」を少しでも探る手がかりになると思われる。また楽譜類と比べて台本類は、ものによってはアクセスしづらい資料の 1 つであるが、特に私のようにオペラ・コミックやオペレッタなど台詞入りの音楽劇を研究する者にとってはそれが悩みの種である。例えば後者のプロジェクトはかなり限定された

ものであるとはいえ、研究者に希望の光を与えるものであろう。発表者はあらゆる台本がデジタル化されることを望んでいるといった内容のことを述べられたが、私にとってこれは心躍る話であった。またこの他にも、世界中で発見されたナポリあるいはイタリアの作曲家による資料についての発表などが個人的興味を引いたが、山田高誌氏による国立音大所蔵のナポリ版《秘密の結婚》(チマローザ)についての発表は、日本内外にとって画期的なことであった。

オペラに限らずさまざまな話題が取り上げられたことは言うまでもないが、その内容についてはここでは触れないでおく。ともかく私が大変感心したのは、今回の会議でいわゆる「グローバリズム」の好ましい形を見たことである。大変活気のある会議であることは前から耳にしていたが、ここに参加している人びとは皆、世界中の音楽情報を共有化し、その情報へのアクセスを平等化しようという共通目的に向けて努力をしている。資料のデジタル化、オンライン化という言葉は当たり前に使われて久しいが、IT のもたらしたその財産の素晴らしさを今更ながら実感せずにはいられなかった。「グローバリズム」の功罪が問われるときはその欠点ばかりがクローズアップされがちだが、今回の会議では、他国のものを理解し自らも惜しげなく情報を与えようという世界の人びとの心の変化を強く感じ、それは私に「世界のバリアフリー化」という言葉を連想させたのであった。

(もりよしこ 音楽学)



ナポリ音楽院中庭
Ⓜ

NEWS

■ 「日本の音楽資料」調査委員会、発足へ

昨年 10 月 25 日に開催された日本音楽学会総会で、「日本の音楽資料」の公開・データベース化を推進するための準備委員会として「日本の音楽資料」調査委員会の発足が決定しました。調査委員会が対象とする「日本の音楽資料」は、日本の諸機関が管理する、西洋音楽の筆者譜、西洋音楽の 1800 年以前の印刷楽譜、邦人作曲家の筆写譜等、であり、国際 RISM 委員会への登録ならびにデータベース化の可能性と課題なども含めて調査を行う、とされています。

準備委員会の委員長は日本音楽学会の久保田慶一氏。同学会の西川尚生氏のほか、IAML 日本支部と音楽図書館協議会から 2 名ずつが委員として参加し、2009 年 10 月に開催予定の日本音楽学会総会に調査結果を報告し、今後の方針を決定する予定とのことです。

日本音楽学会からの要請を受けて、役員会ではこの件について話し合いを重ね、1 月 31 日の役員会において、IAML 日本支部からは岸本宏子氏と寺本まり子氏を推薦することが決定しましたので、ご報告いたします。

会計から

■ 2009 年度会費納入のお願い

1 月 1 日から新会計年度が始まりました。会費未納の方は、ゆうちょ銀行振替または銀行振込でご送金ください。年会費と振込先は以下の通りです。

●年会費 個人 6,000 円 団体 14,000 円

●振込先

ゆうちょ銀行 00130-5-75629 IAML 日本支部

三菱東京 UFJ 銀行 六本木支店

普通 1089206 IAML 日本支部 (イムにホジブ)

代表 森佳子

連絡先の変更も併せてお知らせください。

IAML 日本支部会計係 森佳子



事務局だより



■事務局への連絡

IAML 日本支部事務局住所は、日本近代音楽館気付となっておりますが、お急ぎのご連絡は下記事務局長宛に直接お願い申し上げます。

事務局長：松下鈞

==== Postscript =====

年が改まり、会員の皆様にはすでにアムステルダム年次大会のお知らせが届いていることと思いますが、2008 年 7 月のナポリ大会の特集をやっとお届けすることができました。大変遅くなりましたことを深くお詫び申し上げます。

今回は執筆者から写真をたくさんご提供いただきました。ニュースレターは IAML 日本支部のホームページにもアップしておりますが、そこではカラーでご覧いただくことができます。紙面の都合で掲載できなかった風景写真もウェブには載せてありますので、是非ご覧になってみて下さい。

■ 会員の活動情報をお寄せ下さい

ニュースレターの内容の更なる充実のため、会員の皆様より情報を募集することにいたしました。自薦他薦を問いません。研究会や演奏会などの催し、出版等、広く会員向けに告知したいことなどを下記担当宛にお寄せください。

ニュースレター担当 末永理恵子

Newsletter — 国際音楽資料情報協会日本支部
第 34 号

2009 年 2 月 1 日発行

発行 国際音楽資料情報協会 (IAML) 日本支部

〒106-0041 東京都港区麻布台 1-8-14

日本近代音楽館気付

<http://www.iaml.jp>

ナポリ 4 景

photos by
Dr. Ryuichi
Higuchi

